

看護職部門

そばにいたいんだもん

ふかつ こ
【深津 より子・神奈川県】



入選

あれから30年もたってしまいました。ふとした瞬間にその光景が昨日のここのように鮮やかによみがえります。小児病棟の実習で受け持った5歳の女の子との出会いです。女の子は再生不良性貧血で長い間、入院生活を強いられ自由に走り回ることもできずにいました。看護学生の私は何とか女の子に受け入れてもらおうと看護計画を立てていくのですが、うまくいきません。いつも一人、なかなか心を開いてはくれないのです。

お母さんも「この子難しいでしょ」と苦笑い。長い入院生活で彼女は笑顔さえも少なく、自分を表に出せない子になってしまったのでしょうか。彼女が内に秘めていることを分きたい、子どもらしく自分を表現できるお手伝いがしたいという思いが強くなりました。「私が彼女だったら何がしたいか」と思いを巡らせたとき、分かったのです。5歳の女の子にとって家族がどれほど恋しいか。だから、体を拭くときもお母さんの面会を待って一緒に拭きました。頑張って毎日面会に来るお母さんにも励ましの言葉を掛けました。「大変ですけど、どうぞ毎日来てあげてくださいね」。

実習も最後の日、私は女の子に「お父さんにお手紙書こうか。お父さんは会いに来たいけど、お仕事を一生懸命頑張っているから、来られないんだもんね」と病棟にあったかわいい便箋と封筒を手渡しました。実習中、一度も面会には来られていないのです。

その時の彼女の丸い大きな瞳の笑顔は今も忘れることができません。彼女はお父さんの似顔絵を便箋いっぱい描きました。そして封筒の後ろに自分の名前と並んで「お父さん」と書いたのです。私が「表にお父さんの名前書くんだよ」と教えると、「いいんだもん。お父さんも一緒に居たいんだもん」という言葉が返ってきました。私は胸が熱くなりました。いつでも相手の立場に立って考えることの原点を教えてくれた体験です。